

## 冉求はいないか

今読んでいる江藤茂博編『生きる力がわく 「論語の授業」』(朝日新聞出版、2013)か ら引用。

きゅう

再求 日、非不説子之道。 力不足也。 (冉求曰わく、子の道を説 ばざるにあら ず。力足らざるなり。)

子曰、力不足者、中道而廃。今女画。 (子曰わく、水力足らぎる者は、中道にして 廃す。今女 は画れり。)

○冉求「先生の道がうれしくないのではありません。力がたりないのです。先生「力が足りないものは中途まで来て投げ出しますが、いま君は(まだ進めるのに)見かぎりをつけてしまった。|

再求は、孔子が示した〈道〉を学びたいとは思っているけれども、自分にはその力が足りない、と告白しています。自分を正直に「力の足りない者」と見なしたこの告白は、謙虚なものとしてほめられてもよさそうです。

しかし、孔子の受け止め方は違いました。 冉求は「力が足りない」から前進できないと 考えていますが、孔子がいう「力が足りない 者」とは、「中途まで」は前進する者を指し ます。孔子に従えば、冉求の告白は「力の足 りない」ことを言い訳にして、ただ「しない」 だけのことであって、けっして「できない」 ではないのです。

以下、このやりとりについて、「子、冉求の自ら画るを咎むるなり」と、孔子が冉求の 消極的な態度を叱ったとみなす三島毅の「講 義」(\*保戸塚注:三島毅=二松学舎大学を 創立した明治時代の漢学者。「講義」はその著作『論語講義』(1917))を引用し、ポイントを整理してみましょう。

まず三島は、冉求の心持ちを「吾は夫子の道を企慕して得んことを欲せざるにはあらざれども、吾の精神力量之れを得るには足らざれば、如何ともせん方なし」と説明しています。自らの精神力不足が、孔子が示した〈道〉の獲得を阻んでおり、何とも手立てがないと途方にくれた様子だというのです。(中略)

再求の告白を聞いた孔子は、怒りがこみ上げてきたのでしょう。繰り返しになりますが、孔子がいう「力の足りない者」とは、冉求が言い訳に使ったそれとは全く違います。道路を歩行することを例にとれば、たとえ道半ばであっても全力で進み、もう起き上がることができないほどの状態の者が「力の足りない者」なのです。

「力の足りない」ことを言い訳にした冉求の態度は、歩み出す前から「できない」と自らの力を限定して歩みを止めています。孔子はこの態度を叱ったのだと三島は「講義」したのでした。

マラソンや登山の例を出すまでもなく、私 たちも目標を掲げた以上はゴールしたいと思 うものです。しかし、取り組む前から「でき ない」と言ってあきらめてしまうのでは、結 局、冉求の態度と同じになってしまいます。

\*

25Rの中にももしかしたら「冉求」がいる のではないだろうか。しかし、自から自分を 「画る(=限定する)」には、君たちはまだ まだ若いし、努力不足でもあると私は思う。